

上野 寛

「右利き社会と左利きについて」

はじめに・・・2頁

第1章 左利きの基本的な疑問・・・2頁

第2章 左利きを取り巻く社会環境・・・7頁

第3章 宗教と左利き・・・11頁

第4章 左利きに関する社会提言・・・13頁

第5章 現代の左利き・・・17頁

まとめ・・・18頁

参考文献

はじめに

私は今回「左きき」というテーマについて研究しようと考えた。私にそのテーマを与えるきっかけになったのは、「ジェンダー」という考え方が大きく関わっている。「ジェンダー」というのは、主に男女間における性差別を暴きだし、告発することでその性差別を取り除こうという考え方である。男女間の性差別と言っても、女性側が被害を被る場合が非常に多い。その女性差別は家庭、社会を問わず、全世界に存在している、にも関わらず、私はこの問題に関して無自覚であった。なぜか。それはたとえ私が女性差別に無自覚でも生きていくことができる「男性」であるからである。男性を中心に、男性に都合のよい社

会を形成してきた結果、知らず知らずのうちに「女性はそれであたりまえ」という考えが男性の間に定着してしまっているのではないだろうか。私自身も、本学で「ジェンダー」という授業を選択していなければ、一生その差別問題について考えないどころか、気がつきもしなかっただろう。

そこで、「左きき」である。ジェンダーと同様に、何気なく生活を送る上で、差別と感じたり不便と感じるものは他にないだろうかと考えた結果、浮上してきたのが「左ききは差別の対象になっているのではないか」という考えであった。私自身が左ききなのだが、ジェンダー的な考えがなければ、左ききでのせ生活上の違和感に気付くことはなかっただろう。では、その「左ききの違和感」とは何なのだろうか。以降、それを探っていくことにする。

第1章 左利きの基本的な疑問

左利きというものを知る上で、まず初めに思い浮かんだ疑問が二つあった。そのふたつの疑問とは、

「左利きの人口の割合」

「なぜ左利きが生まれるのか」

である。この二つの疑問に対する答えは、非常に曖昧なものである。なぜ曖昧なものなのか、その理由も織り交ぜながら一つずつ見ていくことにする。

・左利きの人口の割合

一般に、左利きの人口の割合は、総人口の約10%だといわれている。ここで、曖昧な表現を使わざるを得ないのは決定的な根拠が実は存在しないのだ。有力視されるデータがだいたい10%前後であることから、そう言われているに過ぎないのである。では、そのデータの例を少し取り上げてみることにしよう。

以前、生活上の様々な情報を提供するというテーマのテレビ番組『発掘！あるある大事典』で「右利き、左利き」というテーマを扱ったことがあった。そして、その時にも「左利きの人口の割合」を調査している。調査の対象人数は、私が調べた限りでは明らかにされていないのだが、(インターネットで過去の放送内容を調べたため)その調査結果も、左利きの人口の割合は約10%であると結論づけられていた。

もう少し具体的な調査の例もあったので載せておこう。アメリカのアイアラ・S・ワイル博士が利き手に関するデータをまとめたものである。1934年に発表されたもので、かなり古いデータではあるが、左利きの割合を求める上で、現在も参考にされているものである。以下、『左利き世界と左利き人間』、203～204頁より抜粋。

(%) (発表者、調査の種類・時期・対象など)

1. 00% ハッセとデーナー (ドイツ)。5, 141人のドイツ兵の調査、1914年。
2. 00% ジェイムス・M・ボールドウィン。ニューヨーク、1911年。
3. 80% K・シュトットガルト、1932年。
4. 00% チェイザーレイ・ロンブローゾ、1903年。彼は左利きに反対する一人。

調査の詳細不明。

4. 00% E・シュタイア、1909年。彼は以前にもドイツ陸軍の兵士の利き手を調査した。
- 4・00% W・G・ワイズリー（オハイオ）。オハイオの第8小学校の1万8千人の児童が対象、1930年。
4. 60% シューファー、ベルリンの小学校児童が対象、1932年。
5. 10% シリル・バード。ロンドン州議会のテスト、1921年。
- 7・77% マリーア・シラー。シュトゥットガルトの小学校児童7千人が対象。
7. 90% フランツ・シュベルツ。スイスのシャーフハウゼンの1千人の児童が対象、1932年。
11. 00% E・アルンシュタイン、1931年。パレスチナの2千人の児童が対象。
15. 70% フランシス・ラマリー。1千人のアメリカ児童が対象。
26. 10% キーナン、1930年。アメリカの1千人の大学生が対象。
28. 80% ウーとピアソン。アメリカで実施した7千件の調査、1927年。
29. 70% B・パーソン。左利きに関する著書（ニューヨーク、1924年）がある。800件の利き目に関する調査に基づく数字。
35. 30% アイアラ・S・ワイル博士、1932年。人間のものを持つ生来の習慣の調査に基づく。この数字はブリング・ブリンゲルソン博士の推測する数字と符号する。

以上である。ちなみに、最後の「ブリング・ブリンゲルソン博士の推測する数字」は、ミネソタ大学のブリンゲルソン博士が、「先生や両親の側でまったく干渉をしなければ、今日生まれてくる子供100人のうち34人が左利きであろう。」と発言したのにならって書かれたものである。ワイル博士の調査によると、左利きの割合は、1%から3.5%までと、かなりのばらつきがある。それには、何を基準に「左利き」と判断したのかが大きな問題になってくるのだが、残念ながら、その判断基準は残されていない。現在も、「左利き」とは何をもって定義づけられるのか、明確な答えは出ていないのである。

しかし、利き手調査の規格を統一しようとする動きがないわけではない。1971年にはエディンバラ大学のオールドフィールド教授が「エディンバラ利き手テスト」を作成し、それを参考に日本でも名古屋大学の八田武志教授と鳴門教育大学の中塚善次郎教授が「N,H,利き手テスト」を1975年に発表した。「N,H,利き手テスト」は、日本人向けに、日本の文化背景を考慮した作りになっている。参考までにその質問項目を載せておく。

N.H.利き手テスト

- ① 消しゴムはどちらの手に持ってけしますか？
- ② マッチを擦るのに軸はどちらの手に持ちますか？
- ③ はさみはどっちの手に持って使いますか？
- ④ 押しピンはどちらの手に持って使いますか？
- ⑤ 果物の皮を剥くときナイフはどちらの手に持ちますか？
- ⑥ ネジまわしはどちらの手に持って使いますか？
- ⑦ 釘を打つときカナヅチはどちらの手に持ちますか？

⑧ かみそり、または口紅はどちらの手に持って使いますか？

⑨ 歯を磨くとき歯ブラシはどちらの手に持って使いますか？

⑩ ボールを投げるのはどちらの手ですか？

以上の各項目ごとに、左手を使う場合は－1点、どちらでもない場合は0点、右手を使う場合は＋1点とする。合計が－4点以下の場合は左利き、＋8点以上は右利き、それ以外は両利きとなる。

この調査方法は非常に使い勝手がよいが、それでもまだ「一つの方法」というレベルに収まっているに過ぎない。

年齢別の左利きの割合

次に年齢別に左利きの割合を示したデータを見てみることにする。(抜) 博報堂生活総合研究所が1999年6月に行った調査によると、

- ・ 10～20歳代 12%
 - ・ 30～40歳代 8.8%
 - ・ 50～70歳代 3.3%
- (両手利き、矯正された人も含む)

となっている。

これとは別に、もう一つのデータがあるのでそちらも見てみよう。アメリカのスタンレー・コレンらが集めた5147人のデータを分析した結果、日本で行われた調査同様、高年齢になるにつれて左利きの割合が減少していることに気がついた。スタンレー・コレン『左利きは危険がいっぱい』78頁より引用しておく。

結果は、人口全体に占める左利きの人の割合が、高年齢層になるにしたがって次第に低下していたのである。この減少は、実のところ極めて大きいものだった。10代の年齢層では人口の15%が左利きだったのに、50代の年齢層では左利きの人の3分の2がいなくなり、わずか5%を占めるにすぎなくなっていた。さらに、80歳以上のグループになると左利きの人口は1%にも満たなかったのである。

これらのデータからは、世代ごとに、左利きをいけないものとする感情が薄れてきた証拠になっているという人もいる。(これらのデータに見受けられる、高齢者の左利きの割合の少なさに注目したスタンレー・コレンは、後に「左利き早死に説」を提唱することとなった。)

しかし、利き手を自由に使えばよいとする風潮は世代ごとに増してきた、ゆえに高齢者に左利きは少ないという説は、十分な根拠がない。たしかに、利き手に関する社会の寛容度は変化している。しかし、同じく高齢者に左利きが少ないのは、その時代に左利きが抑圧されていたからだと考えていたスタンレー・コレンが、その裏づけ調査を行った結果、必ずしも一致するものではなかったのである。

その調査の詳細は、手の自由化傾向がもっとも顕著に現れた北米大陸と西ヨーロッパで調査された1911年から1978年までの利き手調査のデータを集め、右手利き人口の歴史的推移を調べるものであった。

もし現在の左利き高齢者が若年の時に、無理に右利きに矯正されていた、というのならば、過去の右利き率は今以上に高くなければいけない。しかし、コレンらのデータによると、その右利き率は70年近くにわたり、ほぼ90%前後と変わりが無いのである。確かに緩やかに左利きの増加が確認できたのだが、高齢者の左利き人口の少なさを証明するには、もっと極端な数字の推移が必要だったのである。

ここまで、左利きの人口について見てきたが、「左利きの割合は約10%」という曖昧な情報に頼らざるを得ない現状を理解していただきたい。まだまだ解明されていない点が多く、それが研究者を悩ませ続けているのである。

・ 左利きが生まれる理由

そもそも、なぜ左利きの人間が生まれてくるのか。この疑問に対して明確な回答は、現代科学の力を持ってしてもいまだに得られないというのが現状だ。当然、多数の説が存在するので、ここでいくつか紹介しておくことにする。

- ・ 利き手は遺伝する
- ・ 脳の組織や身体の構造が利き手を決める
- ・ 胎児期、出生時の病理的要因から生じる
- ・ 環境が利き手の決定に大きく作用する

などといったものが現在有力視されている諸説である。もう少し具体的に見てみよう。

1. 利き手は遺伝する

利き手は遺伝性のものであるという考えは、古くは1877年に、チャールズ・ダーウィンが提唱している。考え方は、右利きが優性であり、左利きが劣性であるというものだった。日本でも、1934年に遺伝学者の駒井卓が京都市内の小学生に大規模な利き手調査を行い、左利きとは平常の遺伝だとしている。そして駒井も、左利きは劣性だと考えていた。次に挙げるのは、有力な利き手遺伝子仮説のひとつである「アネットの右寄りシフト仮説」である。以下、『見えざる左手』6頁より抜粋。

血液型、目の色や肌の色などと同じように（青い目や金髪は茶色の目や黒髪に対して遺伝的に劣性）、利き手も遺伝による形質と仮定する。

根本にある考えかたは右利きが優性であり、左利きが劣性であること。これまで様々な仮説が提唱されており、中でも有力視されているのは、イギリスの心理学者マリアン・亜ネットの「右よりシフト仮説」である。

アネットは、利き手と大脳半球の言語中枢との関連性から、右手使用にシフトする形質を持つ形質遺伝子 $RS+$ と、右手使用にシフトする形質を持たない形質遺伝子 $RS-$ を規定する。これらの組み合わせから、95%は右手使用にシフトする形質を持つ右利きとなり言語中枢も左脳にある ($RS+$ あるいは $RS-$)。残りの25%は右手使用にシフトする形質をもたない。 ($RS-$ —) よって、考えうる偶然の要因（教育や育児をはじめとする環境的な要因や、双生児をはじめとする出生時の状況など）によって利き手は決定する、としている。

この偶然の要因が何たるかは、大いに注目したいところ。アネットの仮説に従えば確率的には半々となり、12・5%が右脳に言語中枢を持つ左利きとなる、と言えよう。

利き手は遺伝するという説の裏づけには、歴史を解明することも必要になる。石器の消耗を調べると、右手用に作られたものが多いということが分かった。古代エジプトの壁画によると、右手で筆記を行う人間が描かれている。こうした事実から、人類は古くから右利きが多数であったことがわかった。そしてそれは遺伝により、現代まで受け継がれているという考えが強まった。

しかし、単純に遺伝によるものとは断定できないデータがでてくる。カナダの心理学者、スタンレー・コレンが、1913年から1982年にわたり発表された家庭に対する利き手調査の結果をまとめあげた。内容は、両親の利き手によって、生まれてくる子供の利き手にも変化はあるのか、といったものだ。その結果を順に見ていくことにする。

- ・両親とも右手利きの場合—約10人に一人の割合で子供が左利きになる。
- ・父親が左利きの場合—両親とも右利きの場合と同じく、子が左利きになる割合は約10人に一人。
- ・母親が左利きの場合—子供が左利きになる割合は、両親が右利き、父親が左利きの場合よりも約2倍になる。つまり約10人に2人の割合で左利きの子供になる。
- ・両親とも左利きの場合—両親とも左利きの場合には、子供も左利きとなる確率が他の3つのケースと比べて高い。約10人に3～4人となる。

以上の結果から、母親、そして両親が左利きの場合には確かに子供の左利き率が上がっている。しかし、それを遺伝的なものとするならば、なぜ父親でなく母親なのか、両親が左利きの場合には、そもそも子供が左利きになる確率は100%ならなければいけないのに、そうはなっていないのはなぜだろう。これには遺伝学も予測しきれないため、「左利きは遺伝によるもの」という仮説はいまだに仮説の範囲を超えられないのである。

2. 脳の組織や身体の構造が利き手を決める。

この説は、主にホルモンが関係してくる。つまり、「性ホルモンが脳に何らかの影響を与えて、左利きになる」という説である。この仮説を提唱したのは、神経学の研究をしていた、ノーマン・ベシュヴィントとその共同研究者たちである。以下はその仮説である。

人間の脳半球は胎児期からすでに非対称性が見られ、左半球は右半球よりもあとから発達する。子宮にとって唯一とも言うべき環境であり、胎児は、その中で様々な危険にさらされやすい。(中略)

その時「男性らしさ」をもたらすテストステロンが、男性胎児の精巣から過剰に分泌され循環すると、本来あるべき<左脳>の発達が遅れることがあり、<右脳>がその働きを補って発達することが考えられる。こうした影響から、<右脳>が優先位脳となって左利

きが生まれるというのである。

—『見えざる左手』157頁—

つまり、男性ホルモンであるテストステロンの分泌異常によって、子供が左利きになるというのである。この場合、男性胎児は母体以外にも自らテストステロンを分泌することができるので、女性よりも男性のほうが左利きになる確率が高いと考えられている。

また、天才児や、サヴァン症候群と呼ばれる特異な能力を持った精神障害者に左利きが多いのは、テストステロンが影響を与えているとかがえられている。また、それは悪い方面にも機能し、大脳半球や免疫系の発達を遅れさせ、様々な障害を引き起こすきっかけになっていると考えられている。

しかし、必ずしも左利きがそういった病理的障害を抱えているわけではない。ゆえに、この説もまたひとつの説としてとどまっている。

3. 胎児期・出生時の病理的要因から左利きが生じる

前節とも多少繋がりを感じさせるのが、この「胎児期・出生時の病理的な要因から左利きが生じる」という説だ。しかし、こちらは外傷もその要因としている。例えば、ひどい難産の末に生まれてきた子供は左利きである可能性が高い。胎児の時、母体の影響により病気になった子供も、同じく左利きが多い。

外傷による左利きは何も胎児期、出生時に関わらないという説もある。頭に傷を負うなどの虐待を受けた男性は、左利きになった。人間の左側を司るのが右脳であるから、そちら側に何らかの傷を負うと左利きになると考えられているのだ。

しかし、この説に対しても、もしそれらの要因で左利きになるのなら、大多数の健康な左利きの人々の説明がつかない。実際、それらの要因で左利きとなった人々は何らかの問題を抱えていることが少なくない。やはり、この説も説得力に欠けるのである。

4. 環境が利き手の決定に大きく作用する。

この説は、出生後の環境、つまり家庭や社会の環境によって利き手が決定づけられるという考え方である。次章では、その左利きを取り巻く環境について考えてみることにした。

第2章 左利きを取り巻く社会環境

現在、左利きを決定づける理由のひとつとして数えられるのが社会環境であるのだが、それではなぜそういったことが言えるのだろうか。ここではその社会環境、特に日本社会にスポットを当てて考えていく。

右きき社会

右利きの人にはピンとこないかもしれないが、世界中はほとんどの国が実は「右利き社会」である。知っての通り、人類は大多数が右利きである。その歴史は前章でも触れたとおりかなり古く、人類が道具を使いはじめた時までさかのぼることができる。その後、人間が「社会」というものを作りだすと、その中では「ルール」というものも作りだされる。右利きもそんなルールの一つとして捉えることができるだろう。もともと右利きの人、自分たちが便利のように社会を作っていた。そこに少数派の左利きの意見が反映されることは、今現在にいたっても難しい。左利きはやむをえず、「右利き社会」のルールに従って

生活することを強いられているといえる。

右利きへの矯正

左利きになる理由の一つとして社会環境が挙げられるのには、「左利きを右利きに矯正する」という行為が物語っている。つまり、左利きでは暮らしにくい社会であるからだ。そこから、左利きを矯正する理由は、社会で暮らしやすくするための優しさ、と捉えることもできるだろう。しかし、理由はそれだけではないのだ。

マナー

人間が社会を形成して行く過程で生まれたものがある。それは、「マナー」というものだ。右利きありきの右利き社会で形成されたマナーが、左利きに順応するわけがない。そこでうまくことが運ばないとすると、「マナー知らず」、「不器用」となってしまうのだ。

そんなマナーの一つとして、今でも口やかましく言われる「箸づかい」がある。われわれ日本人に馴染み深い箸使いだが、実は長い間左手に箸を持つのはご法度とされてきた。それには日本の道徳的な基盤である「儒教」が関係してくる。儒教には、「礼は飲食から始まる」という教えがある。そして「箸使いを見ればその子の親がわかる」と言われてきたように、われわれの食卓には箸が欠かせないものとなっている。儒教のそういった食生活でのマナーにおいて左手で箸を持つな、というのはどこからきたのであろうか。

儒教のマナー

儒教における「礼」というものがある。その意味は国家から家族にいたる、もっとも重要な道徳的観念である。礼の歴史をたどると、それは古代中国で編纂された『礼記』にまでさかのぼることができる。儒教圏での礼儀作法に関する事柄は、この『礼記』に凝縮されている。

その中の一節には、食事作法にまつわる文がある。〈子能食食 数以右手〉

意味は、「子供が自分で食事をするができるようになったら、右手を使って食べるように教えなさい」というものである。

儒教とともに箸が日本に渡ってきた、と考えられるならば、その後千数百年にわたりその教えは守られてきたということになる。礼儀作法について、やかましく言い立てるのが目立たなくなってきたのは、ここ数十年の間である。価値観の多様化は、伝統をも変化させられるものである。

進化するマナー

左手で箸を持つのはマナー違反であるという考え方は、もはや消滅したといっても過言ではないくらい、最近では耳にすることがない。その他の礼儀作法も失われつつあるのではないかと危惧されている中、現代の礼儀作法についての考えを聞き出したインタビューがあるので引用させていただいた。話し手は、室町時代に生まれた小笠原流礼法の3代家元、小笠原忠統（おがさわらただむね）氏、聞き手は引用した本の著者、大路直哉氏である。

—礼儀作法とはどういうものですか？

「礼儀作法とは、自分を飾るためのものではありません。相手に不快感を与えない動作を身に付けることです。

よく、たったひとつの作法で、あらゆる相手と対処しようとする人がいます。本人は正

しいことを習って完璧だと思っているでしょうが、実は礼儀知らずにすぎません。それこそ、他人に対して自分をよく見せかけているだけなのです。一度覚えた作法に固執するのは、不精者のすることです。

その時々常識に沿った礼儀作法を取り入れるよう、心がけてください」

—左手に箸を持つことは礼儀作法に反するのですか？

「箸使いにつきましても、左利きであれば左手をお使いになればよろしいのです。現代の常識からしてみれば、左利きを無理に矯正するなんて、むしろ非常識です。左利きは悪いことではありませんから、年長者はとがめないように。左利きの人にも、あるがままに生活してほしいと思います」

—食卓で、左利きの人へのもてなしはどうあるべきですか？

「食事をもてなす時、左利きの人顔に“左手で箸を持ちます”などとは書いてありません。ですが、左手で箸を持つ人だとわかっているのであれば、左手で持ちやすいように箸を添えてあげます。これも、相手に対する礼儀なのです」

—礼儀作法を身につける秘訣とは何ですか？

「あなたが生きる時代の常識を知らずして、礼儀作法を知ることはできません」

以上、『見えざる左手』117～118頁より引用

小笠原氏は、その時代に合わせた礼儀作法を心がけるように言っている。過去の価値観に捕らわれ問題を抱え続けるのでは何の進歩もない。その点、彼の考えは非常に進化した考えといえるだろう。

今のところ、細かい作法がある習い事の世界では、左利きには対応しきれていないのが現状だ。つまり、完璧な「右利き社会」であるといえる。ぜひ、小笠原氏のような考えを望む。

左利き蔑視の時代

今でこそ左利きは現代の生活で見かけても、特異な感情を抱く存在ではなくなっている。(もちろん、世界にはそうでない国もある。宗教的理由などであるが、それは後にふれておくことにする)しかし、わが国では昔、確かに左利きを蔑視してきた時代がある。ここではそれを探っていくことにする。

例えば「左ギッチョ」という言葉がある。しばしば省略されて、ギッチョとも言われるのだが、実はこの言葉は蔑称として使用されてきた。今では侮蔑的な意味を持って語られることのない言葉であるが、左利きが差別されてきた証拠と言えよう。参考までに、その語源とされているものを挙げる。

説1. 左手が器用に使えるということを意味する「左器用」が、「ひだりきっちょう」となり「ひだりぎっちょ」と呼ぶようになった。

説2. 作家幸田露伴いわく、「不器用」を「ぶきっちょ」というのと同じように、「左器用」をもまた「ひだりぎっちょ」と呼ぶようになった。

左利きは、実はジェンダー問題にもからんでいる。その昔、日本の女性は左利きだと結婚に差し支えるということがあったというのである。日本でも、翻訳されたことがあるアメリカの文献によると、

「かつて日本では、(中略)左利きの娘は嫁の貰い手がなく、結婚したあとで左利きと分かれば夫の意思で離婚することができた」(ブリスとモレラ、『左利きの本』)

「かつて日本の農村部に住む左利きの女性は、見合いの時右利きのふりをした」(ガードナー、1992年)

とある。いずれも、話の出所は明らかにされていないながらも、日本の女性は左利きだと結婚ができないという点において共通している。

この本の話は、本人の口から語られることはまずなく、活字としてはっきり残されていないのだが、小児科医であり、評論家でもある松田道雄も、

「ことに女の子は、左利きでも右手でお箸を持ち、右手で字を書くようにしつけないと、母親の怠惰のように思われた時代がありました。お見合いの時、若い娘が左利きであることを分からせる動作を見せたら、破綻になることが少なくありませんでした」

と述べているように、非常に信憑性の高い話である。実際、そういった迷信は、左利きが今よりも不遇だった数十年前までは存在感が大きかったのである。

左利きの女性差別問題として、このような話もある。

「男女雇用機会均等法」がスタートした1986年に、会社訪問で左利きゆえに差別を受けてきた女子学生がいる。それによると、担当の面接官が、

「君は左ギッチョなの？社は客商売だし、器具の扱いも不便になるから採用はちょっと難しいね」

と言われたという。

こうした一連の女性差別は、結局は男性優性の社会を保つための手段に他ならないだろう。そして、右利き社会を保つために左利きも差別を受けてきたのである。

戦争と左利き

戦時中には、「左利きに人権を」などと声高に叫ぶはずもなく、無論、日本軍は「右利き社会」そのものである。兵器にしても、いちいち左利き用があるわけではないので、もちろん右手での訓練が強いられることになる。当時を振り返る左利きのひとの回顧録によると、「非国民扱いされた」「教練では手榴弾を投げるときしか許されなかった」「草刈や稲刈りの時左手で鎌を持つと邪魔だといわれた」

など、厳しい状況であったことがうかがえる。他人と異なる点をなるべくなくし、統制しやすくさせた戦時中は、まさに「右むけ右」の右利き社会であったのである。

以上の様々な「左利き」に対する圧力が、左利き矯正への引き金になっていたのは間違いない。

社会の左利きに対する圧力は、何も日本に限ったことではない。左利きに関しては心が広いと言われる欧米でも、実は左利き差別は存在していた。今でこそ、左利きグッズが充実した左右ボーダレス社会に向かっているが、以前は左手を使ったらムチで叩かれたり、左手を縄で縛られたりと、日本と同じように矯正されることが多かったのである。その例がスタンレー・コレンの『左利きは危険がいっぱい』に載せてあるので引用させていただいた。

昔は、教師がことあるごとに、字を書く手を左手から右に変えようとした。私のところ

には、学校での体験談をつづった手紙が数限りなく寄せられている。過去20年ほどの間に教育を受けた人たちからは、左手で鉛筆を取ると手をびしゃりと叩かれたり、鉛筆をむりやり左からもぎとられて右手に持ち替えさせられたりといった話をしばしば聞く。しかし、年齢がずっと上で、1920年代、30年代に教育を受けた人々の手紙によれば、教師や両親の手厳しさはたいがいそんなものではなかった。書き方の授業中は左手を縛られたと書いてきた人もかなりある。字を書くときだけならまだいいほうで、すべての行為を禁じられて、一日中、左手が縛られたままだったという例もあった。

『左利きは危険がいっぱい』97頁より。

第3章 宗教と左利き

左がマイナスのイメージで語られる背景には、宗教が大きく関わってくる。ここでは、宗教が聞き手観にどのような影響を与えたかについて調べてみることにする。

言葉のイメージ

一般に、左という言葉に良いイメージは少ない。日本語の中でも、「左巻き」、「右に出るものなし」など、右が上位で左はマイナスの意味を持つ言葉が少なくない。

そんな中、左のほうが上位にたつ言葉に、「左大臣」というものがある。これは、左を右よりも尊いものとする中国の唐の制度にならったという説がある。では、なぜ唐では左が右より尊ばれたのだろうか。

それには「道教」が関係している。道教は「言事尚左、凶事尚右」（吉事には左を尊び、凶事には右を尊ぶ）という考え方がある。多くの兵士は、右に凶器としての武器を持つから、その考えが生まれたという見解もある。

また、道教は、神道にも大きな影響を与えていると考えられる。その理由を挙げると、

- ・ 神官が祓串を祓う時、左から右へ、そして左へと2回祓う。
- ・ 神前で両手を組むときには、左手を上にし、右手を重ねなければならない。
- ・ 奉られた神の方へと歩むとき、一歩目は左足から。

などといった、左を尊ぶ傾向があるからである。

神道は日本全国隅々まで浸透しているので、もう少し左を尊ぶ意識があってもいいのではないかと思うが、そうはいかない。なぜなら、事実この社会は「右利き」が中心である。いくら左手を神聖視したところで、右利き社会の構造が変化することはなかったのである。

他の宗教と左利き

では、他の国々での宗教では、左利きについてどのような見解を示しているのだろうか。有名なのが、イスラム教やヒンズー教などでは、左手が「不浄の手」とされている、ということだろう。もともと、イスラム、ヒンズー教国の人々は、箸やフォークといった食器を使わず、手で直接食事をする。その時使用される側の手は、もちろん右手で左手は、排泄行為の時、その処理に用いられるのである。衛生的観念から見ても、左利きの人が大手を振って歩けるようになるのはまだまだ時間がかかるといえる。

実は、仏教にも左手を不浄とする考えがある。これは、ヒンズー教の教えにならったものであり、日本でも左及び左手は、よく死と結びつけられている。

そういったヒンズー、イスラム教における左手不浄の考えは、宗教が入り込む前にはすでにその土地の習慣として存在しており、後に宗教と結びついたらと考えられている。

キリスト教の左手観

キリスト教ではしばしば、「神の御手により・・・」といった言葉が使われる。この場合の「御手」とはもちろん、「右手」のことである。キリスト教では、神の右手はその偉大なちからの象徴として捉えられている。イエス・キリストを天へと持ち上げたものも「御右の手」、神からの寵愛を受ける場所も「御右手」側である。反対に、左手は、やはり良いイメージはない。

聖書には、その具体的な例がたくさんある。マタイ第25章34節には次のように書いてある。

「そして、王は、その右にいる者たちに言います。さあ、私の父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい」

それに対して、マタイ第25章41節では・・・

「それから、王はまた、その左にいる者たちに言います。呪われた者ども。私から離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火に入れ」

このように、聖書において右は、左よりも尊重」されている。神に向かい行う十字切りも右手で行われる。これが、左手で行うと、それは神への冒瀆になってしまう。

このようなキリスト教の左右観は、言葉にも表れてきている。例えば、英語でも（ライト）には「正しい」や「権利」といった意味がある。一方、左（レフト）には、「弱い」や「邪悪な」などといった意味があり、悪魔とのつながりがあるとされる。悪魔とのつながりを意味する具体的な例は次の通りである。以下『左利きは危険がいっぱい』29頁より引用。

邪悪なことや悪魔と左側とを結びつける考え方は、かなり古くからある。悪魔に与えられる名前としてもっとも一般的な「サタン」は、言語的に左とは何のつながりもない。ヘブライ語で「サタン」とは、ただ単に「敵」とか「反対者」の意味であって、神の裁きの場に連なる天使なら誰でも、裁判で検察官のような役割を果たすサタンの職を務めることができた。ラビ（ユダヤ教の律法学者）や学者による詳細な解釈、注釈、見解とともに口伝の律法を集大成したユダヤ教のタルムードは、大いなる敵、あるいはサタンの親玉がいたと述べている。これこそが最後に魔王となる人物である。その名サマエル「samael」は、左側を意味するヘブライ語「se'mol」と明らかに関係がある。天上の序列に従い、神の右手に大天使ミカエルが、左手にサマエルが座っていたようだ。サマエルが天界から追放された後にその座に就いたのがガブリエルだが、ガブリエルには（この世の終わりを伝えるという役目を担ってはいたが）左というイメージはまったくないようだ。

以上。

左が邪悪なものであるとすれば、邪悪なことは左手で行われる、といった解釈になる。例えばタロットカードの図柄では、悪魔は左に剣を持つ。すなわち、左利きということに

なる。このように悪魔を絵で表すときは左利きにされていたのだ。

すると今度は、邪悪な人間は左利きに違いないということになり、魔女狩りへとつながっていくのである。魔女は、全ての儀式を左手で行う。キリスト教では、儀式はほぼ右手で行われるので、ちょうどその反対の意味であろう。もちろん、左利きの人間すべてが魔女の儀式を行っているはずもなく、無意味に殺害された左利きは数しれない。

また、体の外側にほくろやしみ、傷跡がある人間は、それらが悪魔とつながりがある印とされ、拷問や尋問にかけられたり死刑にすることができた。

このように、宗教に基づく左利き弾圧は現在、日本や欧米では言葉の意味にその名残が見受けられる程度であるが、イスラム教などではそうっていない。サウジアラビアでは、左手を公然と使用するものならば、法律違反になってしまう。

左利きも、男女平等も認められない社会では、宗教観が何よりも尊重されている。信教の自由は認められるべきであるが、その社会に生きる人々の人権も認められるべきではないだろうか？

第4章 左利きに関する社会提言

わが国の左利きに対する社会的な意見は、明治以降、たびたび出現している。いづれも大きな動きにはならなかったのだが、抑圧されていた左利きに光を与えるきっかけになったのも事実だ。ここでは、どのような利き手に関わる運動があったのかを説明する。

左利き教練説

1880年、左利きに関する教育案が提案された。発案者は、当時帝国大学総長に就任した加藤弘之氏である。哲学研究会第5回講演で、それは発表されている。演題は、そのまま「左利き」である。それではどういった内容なのであろうか。加藤の個人雑誌色が濃かったという『天則』第3編第6号（1890年）に収録されている講演内容を、『見える左手』の著者、大野直哉氏が現代語訳にしたものがあるので、かいつまんで引用させていただく。

（前略）

人間の場合、身体の各部分がそれぞれ仕事を分担している。例えば、食事や重いものをもつときには、おもに右手を使う。そのために、左手は右手の補助的な役割を果たしているにすぎない。

右手が1円分の仕事をしたとしても、左手は50銭、あるいは30銭分の仕事しかできない理由は、そこにある。何らかの手を打たないと、左右の手がそれぞれ1円分の仕事をこなすなど、土台無理な話なのだ。

目も手と同じくふたつあるが、右目は赤を見て左目は白を見るというように、別々にはたらいっているわけではない。たとえ片目を失っても、赤だけでなく白をも見ることができる。多少の不自由こそあれ、格別に差し支えないのだ。

そこで、左右の手も同じように利くべきだと、わたしは考える。耳や鼻にしてもそうだ。分業ではなく、一致団結して用を足すのが理想だということを知るべきだ。（中略）左右の手に能力差があってはならないと考える立場上、ここに一つの教育方法を提案する。それ

は、人類の大多数を占める右利きに対し、教育の力で左手も右手と同じように使えるようにはたらきかける、ということだ。そうすれば将来、日本の社会に利益をもたらすにちがいない。(『見えざる左手』29、30頁)

加藤は左利きの人間が右利き社会を生きるうえで、器用に右手まで使えるようになる様を見て、この「左手教練説」を説いた。左手は、右手に劣るという考えも批判している。

しかし、この説にはいかなる経緯があって左利きが両手を使えるようになったか、つまり、矯正にまつわる苦勞のことだが、それが欠落した説だと言える。確かに両手を使えることができれば便利だろう。しかし、それに至るまでを少々楽観視している。

当然ながら様々な反論がでた。

生理学者の大澤謙二は、第1章で述べたような利き手にまつわる研究を紹介し、科学的視点より「人間は完全な両手利きになどなれない」とした。

大澤は、加藤を前にしての反論もしている。その時の反論を、同じく大澤直哉訳で見たい。

明治23年のことですが、ここにおいでになられます加藤博士もまた、こうおっしゃいました。

左利きの人たちが練習によって右手も使えるようになるのに習い、右利きの人も左手を使うのを試みる。その結果、両手が器用に使えるようになれば、社会にとって大きな利益になるであろう、と。(中略)

これについては、しばし考えてみたものの、やはり左右の手が同じように使えるというわけにはいかないと思います。(中略)

左手で何かしようとする、やはり右手が気になります。その逆もしかりです。練習によっていくらかは左右の手が使えるようになるでしょうが、骨を折ってまでして教育したところで、それほど役に立つでしょうか。(『見えざる左手』48～49頁)

この論を境に、「左手教練説」は行き先を失い、影をひそめてしまった。

当然、そこでいったんは花開いた「利き手に関する興味」が終了してしまうのである。

欧米における左手教練

時代は大正にうつり、その当時の欧米の両利き奨励運動の話になる。1913年3月11日付けの京都日出新聞に「左手運用奨励」という社説が掲載された。内容説明は、「左利き教練説」とほぼ同じ。ここに、再び利き手への興味が再燃したのである。

その社説によると、イギリスでは両手利き文化協会が誕生し、アメリカのある工芸学校では左手の使用を奨励し、結果は良好だったとしている。

欧米で生まれた「左手教練説」は、加藤のそれとは異なり、科学的な後ろ盾も備えていた。その利点は次の通り。

1. 両手をつかえば身体のバランスがよくなる。バランスのとれた左脳と右脳の発達を可能とする。知力、理解力、記憶力が増進する。
2. 両手を交互に使えるため、そのぶん疲労感が減少する

3. 大脳の機能障害（脳卒中など）による、失語症の予防や軽減
4. 人間個々の能力だけでなく国益も増進する。

などがある。

イギリスの「両手利き文化協会」は、スローガンに「左手への公正と平等」を掲げ、また両手利きは国益のために必要不可欠といった考えを示した。こうした新しい新しい考えは、初等学校の多くで採用されたのだが、しだいにそれらの考えも疑問視され、やがて人々の関心が遠のくと同時に消滅してしまっただけである。

この実践を伴った失敗により、あらためて「右利き社会」の強さが浮き彫りになったのである。

また、太平洋戦争直前の1940年、戦時向けの「手」にまつわる請願書が名古屋在住の医師らによって衆議院に提出されている。請願人自身の右手の負傷によって、左手が使えればどんなに便利だろうと思ひ立ち、両手利きに興味を持ちはじめたという。

提出した理由も、戦場で右手の自由を失った人々の話を聞いて、幼少期から両手を使う練習をすれば、いざというときに対処できるし、作業効率もあがる、といったものだった。

しかし、戦時中というご時世で受け入れられるはずもなく、かすかな「民衆の声」で終わってしまった。

左手に人権を

1967年の秋に、教育課程審議会は、小学全学年での必須科目に書字を加えるという答申を下した。翌年からは、さっそく指導がスタートし、現在にいたっている。

実は、書字は左手で書くとうまくかけない。筆先が紙を押して書く形になっているので、文字が潰れてしまうのだ。

こうした問題を松田道雄氏が1969年6月10日付けの毎日新聞紙上で、教職組合あてに投げかけた。以下、その内容。

おたずねします。

私はいままで再三、生まれつき左利きのために、これを右手で字を書くように矯正するのは、左利きの子供の基本的な人権を犯すものであると書いてきました。(中略)

しかし、依然として学校では、左利きの子供が字を書くことを認められていないようであります。たしかに先生がたの努力で、今まで左利きの子は右手に矯正されました。クラスの中で自分ひとりが左手で書くということが恥ずかしい上に、先生から右手で書きなさいと言われたら、どんな子供でも転向せざるを得ません。

だが、左利きの子にすると、それはずいぶんつらいようです。わたしは機会のあるたびに、左利きのひとに小学校の時のお習字はどうでしたと訪ねてみるのです。そうすると、全部が、お習字はいやでしたという返事です。(中略)

教職員組合は左利きの子供に、どうしても右手で書くように矯正される方針ですか。もしそうでなかったら、左利きの子供が左手で書くための筆順本を、左利きの人を集めて、早く作ってくださるよう希望します。(『家庭時評 教職員組合におたずねします』)

左利きの児童の気持ちを汲み取った、松田の投書には、かなりの反響がよせられた。い

かに切実な問題であったかがうかがえる。

しかし、それに対する当事者の意見は否定的だった。結果、書字は必須科目に加えられ左利き児童は右手で筆を持つことを矯正させられる状況へとなってしまったのである。

左利き友の会の創立

左利きの人権を無視され続ける状況に、一石投じた人がいる。精神科医であった箱崎総一氏である。箱崎氏のもとへやってくる患者の中に、テープで左手をぐるぐる巻きにされた少女がいた。なんと利き手の矯正のためだという。矯正のために精神疾患にまでなってしまう左利きの人たちを救うべく、1971年に箱崎氏は「左利き友の会」を創立した。

次にあげるのは「左利き党宣言」となづけられた、右利きのスローガンである。

- 一、右利きが優遇されている右手偏重の社会を改善しよう
- 一、左利きの無理な矯正はやめよう
- 一、左利きは異常でないという考え方を普及しよう
- 一、左利きであるための劣等感を消し去るための精神衛生を普及しよう
- 一、左利きの人権宣言をしよう

何はともあれ、日本で初めての左利き友愛団体である。左利きの子供を持つ母親、左利きで辛い思いをした人々、不慮の事故や病気で右手の自由を失った人々が集結することとなった。

万国博覧会の開催や、大気汚染の深刻化など、大きな社会変動のまっただなかに誕生した左利き友の会は、しばしばマスメディアに活動状況を取り上げられ、「右利き社会」の意識変化に一役買ったといえる。

同じく左利きに対する意識に変化をもたらしたものに、歌手の麻丘めぐみの曲、『わたしの彼は左きき』が挙げられる。この曲のヒットによって、それまで悪いイメージしか存在しなかった左利きに。ポップで明るいイメージを植え付けることになったのである。

このように、次第に左利きを取り巻く悪いイメージは消えていくことになったのである。

一方、左利き友の会からは、左利きの子供を持つ「母の会」や「習字の正課に反対する署名運動」といった活動が派生していた。そして箱崎氏自らも研究を重ね、『左利き書道教本』を出版している。刊行当時は左利きの子供の親や左利きの人、右手が自由に使えない人たちから大きな反響があったという。ここに、そのいくつかを紹介しておこう。

斜め書き筆法

紙は机と45度くらい斜めにおくが、自分で書きやすい角度におけばよい。紙の位置を斜めにずらしておく、左手に筆を持つ時横線が「引き」やすくなり非常に書きやすい。紙のよじれを防ぎ、細字を書くとき細い筆で字を横に並べて書くときなどに適した筆法だ。

正座筆法

右手で文字を書くときのように紙と机とを直角にして書くが、紙を置く位置が違う。紙は身体を中心線から左側にずらしておく。こうすると、大きい文字を書いても曲がらず、正しい姿勢で書ける。

さらに、毛筆で書く場合はすずりや墨を左側に置き、手本は右側に置く。そうすれば動

作がスムーズになる。(『見えざる左手』220～221頁)

左利き友の会の終焉

画期的なアイデアや、その行動力によって左利きの地位向上に大きく貢献してきた「左利き友の会」だが、その活動はわずか5年で幕を閉じた。

会費の滞納による財政難、活動に対する関心離れなどが主な理由である。未解決の問題も数多く残されてはいたが、右利き社会へのカウンターとしての役割は、おおいに評価すべきであろう。

第5章 現代の左利き

今日、左利きということでは侮蔑されたり、左手への無理な矯正は着実に減少しているといえる。プロ野球など、左利きスターの活躍や、「左利きはアーティスト性が高い」などの新しい研究が、それを後押ししてくれている。

しかし、忘れてはならないのは未だに社会は「右」中心である。新たに左利きを圧迫する物が出現する場合もあるのだ。その最たるものが、駅の自動改札機である。自動改札機は、投入口が右側についている。これを左手で投入する、ということになると、とても不自然な体勢になってしまうのだ。スペースやコストの理由で左利きが使えづらくするのは、いかがなものか。

この問題は、しばしば話題に挙がるので駅も今後の検討課題としている。

現在の左利き団体

現在の日本における左利き友愛団体は、左利き向けグッズなどを取り扱う会社「フェリシモ」が主催する、「フェリシモ左利き友の会」や、インターネットによる情報交換が活動の中心の「ジャパン・サウスポー・クラブ」、左利きだけのゴルフ愛好会「レフティーゴルフ協会」などがある。ジャパン・サウスポー・クラブは、2月10日を「レフトの日」として(0210:レフト)左利きの地位向上に努めている。また、左利きの人だけを集めて野球大会を開くなど、ユニークな活動も行っている。こういった現在の左利き団体が、今なお根強い「右利き社会」に今後どのような影響を与えることができるのか、期待されるべき存在といえる。

居座りつづける右利き用具

われわれが普段目にする道具類は、左右非対称のものが多い。そしてそれは、大概右手で扱うのにちょうどよくできている。

たとえば、瓶のフタは右手でないと力が入らず、左利きは苦勞する。同じくネジをドライバーで締める際にも、左手では力が入らない。右側だけに刃がある片刃包丁では、左利きの人切ろうとすると、うまく切ることができない。

と言った具合に、まだまだ左手に優しい道具は少ないといえる。左利き用の商品も流通しているが、多少割高となるケースが多い。

生活用品以外にも、楽器などは左利きのニーズにこたえたものは少ない。ギターやベースなどの弦楽器は、比較的流通しているが、トランペットなどの金管楽器などは未だに作られていないのである。

ユニバーサルデザイン

それでは、老若男女、左右の利き手を問わず使える道具はないのか。実はそれらはユニバーサルデザインと呼ばれて、現在も研究が続けられている。

ユニバーサルデザインは、アメリカの建築家ロナウド・メイス氏が提唱した考え方である。ユニバーサル・デザインは、すべての人共通の、設計・構想とも訳されるが、高齢者や、障がいのある人に限らず、子どもや外国人、けがをしている人や妊婦にとっても、安全で使いやすい製品や快適で不便のない生活を送れるものである。

例えば、左利きにとって使い勝手の悪いはさみも、ユニバーサルデザインであれば、柄をにぎるだけで切れるようになっているのである。他にも、カードの4隅に数字がついているトランプや、注ぎ口が両側についているボウルなど、「右利き社会」にしばられることのない考え方を持ったデザインは画期的である。

まとめ

今回の研究テーマでは、左利きがいかに差別的立場に立たされてきたか、また、それに関する社会の動きに焦点をあててみた。

左利きは歴史も古く、曖昧な点が非常に多い。ただ、一つだけ確かなのは、左利きがマイノリティーとして差別の対象であり続けたことである。今現在も、世界は「右利き社会」が中心である。そのようななかで、左利きが市民権を得るのにはもう少し時間がかかるであろう。

左利きは早死にするという話は聞いたことがあるだろうか。スタンレー・コレンが、その提唱者なのだが右利き社会で暮らす左利き人間にとってその世界はストレスを感じるものである。決して右利きには感じるできないストレスだ。そのストレスが影響して早死にするというのなら、とても嘆かわしいことである。(しかし、コレンの研究では、例えば車の運転の場合、対向車とぶつかりそうになり急にハンドルを切った時に、左利きの方は左にハンドルを切る、ゆえに右側通行の国々では、大事故になりやすいとしている。しかし日本などの左側通行の国ではそれがあてはまらず、「右利きは危険がいっぱい」となるはずなのだが、実際はそうになっていない。ゆえに、左利き早死に説はかなり眉唾なものだといわざるを得ない。)

左利きの方が、何かもどかしそうにしている場合は右利き社会のストレスを受けている瞬間かもしれない。

今回の研究がきっかけで、「右利き」の人たちにも、「左利き」というマイノリティー、そしてそれをとりまく差別に気付いてもらえたら幸いである。

参考文献

- ・ 『見えざる左手—ものいわぬ社会制度への提言』 大路直哉著、1999年、三五館
- ・ Japan Southpaw Club <http://webee.co.jp/soutupaw/>

- クラブレフティ <http://homepage3.nifty.com/club-iefty>
- 『左利きは危険がいっぱい』スタンレー・コレン著、石山鈴子訳、1994年、文藝春秋
- 『クロワッサン特別編集版ユニバーサルデザイン Book』マガジンハウス、2001年
- 『新約聖書』、日本聖書刊行会、1988年
- 『両手利きのパワー』安達光、1998年、同文書院
- 『左利きでいこう』リー・w・ラトリッジ、リチャード・ダンリー著、丸橋良雄、尾島真奈美訳、北星出版、2002年
- 『トランスジェンダーの時代』虎井まさ衛著、十月舎、2000年
- 『左利きでいこう！』フェリシモ左利きの会&大路直哉、フェリシモ出版、2000年
- 『左利き世界と左利き人間』マイケル・バーズリー、産学社、1972年
- 発掘！あるある大事典 第219回『右利き 左利き』